

ドイツの詩にみる環境保護意識

若山俊介

0 はじめに

Zu fällen einen schönen Baum,	一本の美しい木を切り倒すのは
braucht's eine halbe Stunde kaum.	30分もあればたやすいこと。
Zu wachsen, bis man ihn bewundert,	しかし、みんなが驚くまでにそれが育つには、
braucht er, bedenk' es, ein Jahrhundert.	考えてもみるがいい、1世紀もの歳月がかかるのだ。

この詩はドイツのオイゲン・ロート¹⁾という詩人が書いたものとして知られている。このロートという詩人は日本ではほとんど無名だが、ドイツでは「人間シリーズの詩人」としてよく知られている。それはちょうどサトウハチローの「お母さんシリーズ」とでもいえるものだが、ロートの場合は、人間という存在をさまざまな側面から観察し、その不十分さ・不完全さをときにメランコリックに、ときにウイット豊かに、あるいは皮肉っぽく、さらには懐疑的に距離をおいて描き出している。「人間というものは・・・」という文句で始まる詩を数多く残しているのである。

冒頭では、上の詩はそのロートが「書いたものとして知られている」というもってまわった言い方をした。実は手もとにある彼の詩集を何冊かたぐってみた。この4行がある長い詩の一部分なのか、あるいはもともと4行だけで成り立っている詩なのかを確認したかったからだ。しかし、そこにはこの詩は見当たらない。自分のまわりにはその何冊かの詩集があるだけで、十分な資料はない。ロートの全集ももっていないから、これではすべてを当たってみたことにはならない。そこで、ドイツの知り合いに問い合わせ調べてもらった。

それによると、彼はロートの5巻本の全集を何度か調べてみたが見つからない。そこで大学のドイツ文学科の先生に聞いてみたがやはりわからず、さらに大学図書館に勤めるロー

トの愛読者にもたずねたが、この人もこの詩を知らなかったというのだ。彼はその後、この詩が緑の党や環境保護団体のスローガンとしてよく掲げられることを思い出し、緑の党の州議会議員のところまでわざわざ足を運んでくれた。しかし、その人からもこの詩の出処はつかめなかったという。彼の結論は、ロートの全集には他の版があるかもしれないが、それにはまだ当たっていないのでロート作という可能性も残されてはいるが、おそらくは学生かだれかが何かの目的でロートのスタイルを借りて作ったのではないかというのである。嘘のような話と思われるかもしれないが、ドイツでは時々こんなことがあるのだそうだ。

そんなわけで、現在のところ、この詩がはたしてオイゲン・ロートのものなのか、あるいはだれかがロートに似せて作ったものなのか、まだ確認できていない。しかし、それはいずれにしても環境破壊に反対するデモなどで好んで用いられるものであることはすでに書いた。筆者がこの詩を知ったのも、ドイツ滞在中にある新聞の写真の中でこの4行の詩がデモの横断幕に書かれていたのを見たことからだった。また、そんなことをしているうちに、この詩はややこしい解釈など必要としない明解な内容でありながら、森林の破壊に対する、あるいは環境全体に対するともいえる、強い危機感、ないしは警告が表明されているものであり、その存在がずっと気にかかっていた。それに伴ってこの詩の出典うんぬんよりも、「環境先進国」といわれるドイツにおいて環境保護や環境破壊というものが文学作品の中にどう反映しているのだろうかということに筆者の興味は移っていった。以下では、そんなドイツ人の環境保護意識が文学作品、特に筆者の専門とする詩においてどんなふう描かれているのかを探してみたいと思う。その際、ドイツを中心としたこれまでの環境問題についても、必要に応じて言及することになる。

1. ドイツにおける「環境問題」の変遷

1990年代に入ると世紀の変わり目ということで、20世紀を回顧するさまざまなイベント、テレビ番組、出版が日本を初めとして世界各国で毎年めじろ押しである。その事情はドイツにあっても同様である。そんなものの一つとして今世紀を1900年から年代記風に記述する辞典が手許にある。²⁾ 世界中の重要な出来事が網羅されているが、これはドイツの本であるから、世界的とはいえないがドイツにとっては重要であった小さな事件もしばしば入り込んでいるのは当然のこととあっていいだろう。1900年から1994年まで年ごとに「政治」、「経済」、「社会」を初めとして、「文化」、「技術」、「スポーツ」などと項目別に記述されているこの辞典を「自然・環境」の項目を中心に初めから1年ごとに手繰ってみた。

そこでまずわかるのは、環境保護とか環境破壊、環境汚染などの言葉は、今でこそごくあたりまえのように用いられ、多くの人々がそれを深刻な問題として受けとめているが、実はこうした環境にまつわる用語が誕生したのはそう昔のことではないということである。ドイツ語で「環境」は〈Umwelt〉といい、「保護」は〈Schutz〉という。また、「環境保護」は2語を続けて〈Umweltschutz〉という。この〈Umweltschutz〉という言葉が初めて使われたのは、1970年、当時環境省の大臣であったハンス・ディートリヒ・ゲンシャーらが環境保護政策案を作成した時のことである。これはつまり、それ以前には「環境保護」は言葉として定着しておらず、人々に明確な形で認識されていなかったということの意味する。言い換えるなら、環境をめぐる問題に真剣に取り組んでいかなければならないという意識自体も同じように、そう古くからあったものではないということになる。

事実、それ以前の年代をみると、「自然・環境」に関する出来事としては、世界各地の地震、大洪水などの災害がほとんどである。中でも特に地震がこの項目をにぎわしている。もちろん、こうした災害も何千人、時には何万人という死者を出すわけであるから、人類にとっては深刻な問題であったし、現在もまだそうであるのだが、今日私たちが「環境」という言葉でイメージする問題とはまた別であり、ある意味では素朴な事件といえる。この時代でそのような意味での「環境」に関連する出来事は、むしろ現代の風潮と逆行するものばかりである。いくつか例をてみよう。まず1921年10月にはベルリンのシェーネベルク地区にドイツで初めてのゴミ（による）発電所が造られたというのがある。ゴミを石炭のように燃やしてエネルギーを得ると同時に、人口300万人というヨーロッパとしては有数の大都市ベルリンのゴミ処理問題を一挙に解決した。さらにその燃えかすによってコンクリート・ブロックなどが作られたという。ゴミを利用するというと聞こえはいいが、燃やされるそのゴミはいっさい分別されておらず、多くの有害物質も含んでいたであろうと考えられる。³⁾

次に1928年にはアメリカでフロンガスが合成されている。これはゼネラル・モーターズによるもので、以来冷蔵庫などの冷媒として、あるいはスプレーなどの発砲剤として何十年もの間重宝されることになる。これが言わずとしれたオゾン層破壊の大きな原因の一つであることがささやかれ出したのはようやく60年代のことであり、さらにその使用を避ける動きが本格的に出てきたのは70年代に入ってからである。⁴⁾

上に挙げた2つの事件をはさんで、その前に第1次世界大戦があり、その後に第2次世

界大戦があることも押さえておいたほうがいいだろう。その上でさらに先へ進むと、1957年9月のドイツ、当時はまだ西ドイツであるが、飲物業者の多くが、それまでデポジットで回収していた瓶に代わって、軽量ガラスの使い捨ての瓶を導入している。これは、関連の専門家の提案によるもので、価格が安く抑えられるという、ひとえに経済的な理由からだった。使い捨て商品があふれ、ゴミの処理に困るという環境汚染について真剣に取り組まれるのは、80年代に入ってからのことであった。⁵⁾

また、1961年6月にはマイン川のカールという町に、ドイツ最初の原子力発電所が建設されている。この発電所は1986年4月25、26日のチェルノヴィリの大惨事まで操業していた。現在の目からみると、その25年間によく何の事故がなかったものだとさえ思うが、チェルノヴィリ以降この発電所は停止されたという。また、このチェルノヴィリをきっかけにエネルギー生産のあり方についての議論は熱を帯びてくるのだが、それでもドイツの核によるエネルギー生産は1991年時点で、全生産の27,5%を占めており、核廃絶には遠い現状である。⁶⁾

さらに1964年にはプラスチックやビニール製品が多用されるようになる。これは床敷材から子供のおもちゃ、自動車のボディーにいたるまで多方面に利用されたが、なんといってもこうした合成物質による包装、具体的にはポリ袋、ビニール袋、あるいはラップなどプラスチック包装フィルム等は手軽で廉価、衛生的ということでおおいにもてはやされた。ドイツにおいてこの合成樹脂の環境に及ぼす悪影響が取りざたされるのは、やはりようやく80年代になってからのことである。⁷⁾ 日本では現在でもプラスチックというとすぐにダイオキシンの名前が出てくるが、それはいまだにきちんと分別されずに他のゴミと一緒に燃やされているという事態が解消してない証拠である。

さて、ここまでの主な事件は、日本と同様著しい発展をとげたドイツの戦後復興の産物といえる。しかし、1965年以降になるとこの辞典の記載内容も一転して、現在の私たちが直面している問題に次第に近づいてくる。これを上と同様に挙げていくと、それこそ大変なページを割くことになると思われるので、以下では主なものを羅列的に記述してみたい。1965年1月：ノルトライン・ヴェストファーレン州でスモッグ対策としていくつかの都市で、スモッグの発生量により交通が規制ないしは禁止される。⁸⁾

1967年3月：英国西岸でリベリアの大型タンカーが座礁、8万トンの原油が流出。海岸は100kmに渡り汚染され、生態系に多大な被害。⁹⁾

1967年4月：ニーダーザクセン州ヴォルフエンビュッテル郡でドイツ初めての放射性廃棄

物の処理。以前塩山だった所に内容量100～200リットルの特別製の樽型容器が80個埋められた。¹⁰⁾

1971年3月：騒音防止がドイツで初めて法的に規定された。¹¹⁾

1971年6月：大気汚染軽減のための法律が初めて成立（ドイツ）。これにより自動車の製造者は鉛の含有量を72年1月1日までにガソリン1リッター当り0.4g、さらに76年までには0.15gに減らさなければならなくなった。¹²⁾

この章の初めの方で述べたように、以上のような事件を背景にして、環境に対する危機感徐々に高まり、同時に「環境保護」という言葉が使われるようになったわけである。それに伴いこれ以降、例えば環境保護団体のグリーンピースの活動は1971年を皮切りとして活発になり、国連も1972年に112カ国を集めたストックホルムの環境会議以降、環境に対する取り組みを強化する。一方ドイツでも、1974年に環境保護法が可決され、また同年に連邦環境省が西ベルリンに設立される。環境の問題はドイツも世界の他の先進諸国もほぼ同じような経緯をたどっていくことになる。そこで取り上げられるのは、リサイクリングであり、車の排ガスの無害化であり、また海洋汚染対策、オゾン層破壊問題、原子力発電所の建設および運転に対する市民団体のデモ、森林保護と例を挙げればきりもない。こうして政府や国際組織が何らかの対策を講じると、それに対抗するかのように新たな環境汚染事件が発生するというたちごっこのような展開で今日に至っている。¹³⁾

繰り返しになるが、以上のような事件をふりかえてみても、ドイツにおいて「環境」をめぐる明確な意識が芽生え、経済優先の姿勢が考えなおされはじめた年はようやく1970年前後のこととすることができる。冒頭に挙げた4行の詩も、おそらくはこの時期に作られたと考えられる。この詩は先にも述べたように、主に「緑の党」によって一種のスローガンとしてそのデモンストレーションに盛んに用いられた。その「緑の党」が国会で議席を取るのは1980年、まだ10年も先のことであるが、いずれにしても1970年を境に急展開をとげたドイツの環境に対する取り組みを象徴する詩とすることができる。

2. ドイツ詩における環境保護意識の展開——危機以前

前章においてドイツにおける環境問題の大きな転回点として1970年という年を挙げたが、それでは、そのような変化は文学、特に詩の分野においてはどんな形で現われるのだろうか。この章以降においては、この点についていくつかの詩を鑑賞しながら、具体的に見ていきたいと思う。

ドイツの詩、抒情詩で自然を歌うものは古くから数多くある。その多くの中から、この章ではたった一つではあるが、まずは例として挙げたい。それはマティーアス・クラウディウスの『月が昇った』¹⁴⁾である。

Der Mond ist aufgegangen,	月が昇った、
die goldnen Sternlein prangen	空には明るくきらびやかに
am Himmel hell und klar,	金色の星々が輝いて、
der Wald steht schwarz und schweiget,	森はうっそうとして静まり返っている、
und aus den Wiesen steigt	そして草原からたちのぼる
der weiße Nebel wunderbar.	白い霧はえもいわれぬみごとさ。

Wie ist die Welt so stille	この世はなんと静かなことか
und in der Dämmerung Hülle	夕暮れにおおわれ、
so traulich und so hold	なんとも優しく心安らぐことか、
als eine stille Kammer,	それはまるで静かな小部屋にいて、
wo ihr des Tages Jammer	一日の憂い、疲れを
verschlafen und vergessen sollt.	眠り忘れさせてくれるよう。

この『月が昇った』はクラウディウス1778年の作であるが、自然と人間、そして神との関係が調和的に描かれた名詩である。また1790年にシュルツ¹⁵⁾によって曲が付けられ、以後多くのドイツ人に愛唱されている名歌でもある。メロディーは単純で、とても芸術歌曲などといえるものではなく、民謡、さらには童謡といってもいいくらいのものであるが、にもかかわらず、あるいはそれゆえにというべきか、「もう一つのドイツ国歌」などという人もいるくらいドイツ人の心に深く訴えかける作品なのである。詩は各節6行ずつ全6節で成り立っているが、その全体を挙げるとかなりの行数を占めるので、ここでは最初の2節を挙げてみた。しかし、これだけでも、この詩においては環境のバランスを崩すような要素は何も見つからず、自然の秩序に対する絶対的な信頼の上に立ち、さらにそれを統べる神の存在が賛美されていることが見て取れるであろう。月並みな表現になってしまうが、古き良き時代の代表的抒情詩ということができる。途中の3節は省いたが、最後の第6節は以下のようなものである。人間はまだ、この地上において限りなく弱い存在であり、

神の力、神の救いなしではとうていやっていけそうもない存在なのである。だから、最後には神に向かって祈るしかない。そういう形で終わっているのである。

So legt euch denn, ihr Brüder,	だから、友よ、
in Gottes Namen nieder;	神の名においてやすむがよい、
kalt ist der Abendhauch.	夕べのそよ風のなんと涼やかなことか。
Verschon' uns, Gott, mit Strafen,	神よ、我らをお咎めなくお守り下さい、
und laß uns ruhig schlafen	我らを安らかに眠りにつかせて下さい、
und unsern kranken Nachbar auch.	我らの隣りの病める人ともどもに。

どこの国にも、自然をテーマとする詩はきわめて数多く存在する。それはドイツにおいても同様で、かれこれ250年前に生まれたゲーテ以降の主な詩人の作品を見ても、それこそ何百、何千あるのか見当もつかない。それゆえ、自然をうたう詩の例を仮にここで50や百並べたところで、とうていそれだけでは十分とはいいがたい。ましてや上の『月が昇った』の詩だけを挙げて、それがドイツの自然の詩の代表であるなどというのは方手落ちもいいところなのだが、それでも従来の自然を描く詩の一つの典型的な例であるということは許されるだろう。それはつまり、人間は大自然の中におかれた他の動植物同様の一つの小さな存在であり、そこである特定期間を無事に過ごしていけるのは神のおかげなのだという構図である。ヨーロッパは基本的にキリスト教世界であり、神の摂理というものが長い間人間の考え方、感じ方を支配してきた。人が生まれ、いずれはまた死んでいくこと、その間の束の間の生存、つまり人の命のはかなさ、さらには自然の恵みに感謝し、自然の猛威にふるえあがって生きること、こうしたことはすべて神の摂理にのっとったことであった。人間は自分の身にふりかかるあらゆることをある種の諦念をもってすべて受け入れなければならなかったわけである。

もちろん、こうした穏やかで調和に満ちた詩の生まれた時代に環境破壊はなかったなどというつもりはない。それどころか今日言うような意味での環境破壊の萌芽はすでに中世にあったという書物もある。¹⁶⁾ それによると、すでに13世紀には無思慮な森林の皆伐があちこちで行われ、特に雪解け時期の山岳地方などでは水の流れを押さえつける障壁の役目を果たさなくなり、細流だった谷間がその大量の水で押し流され地形を変えてしまうようなことがある。また、土地不足から放牧権、伐採権をめぐる問題も起き、農業の形態もそ

れとほぼ並行して、自然物・自然力に頼った粗放農業から一定の土地に対し多くの資本や労働力を費やして効率的な収穫を上げようとする集約農業へと移行したのはいいが、度重なる多毛作により耕地がすっかりやせてしまうというような事態も生じた。一方都市部でも、家庭のゴミ、そして「産業廃棄物」の問題や下水溝や道路清掃という問題がすでに発生している。さらに中世期の基幹産業の一つであった織物製造、チンキによる布地の染色作業から発する鼻をつくような悪臭は、それ自体が一種の公害であったし、そうした悪臭を放つ廃棄物のゴミ捨て場としてはただ小路と道路が使われるだけだったようである。同様に、やはり鼻をつく工場廃水もたいていは都市の濠、ならびに小川やそれよりも大きな一般の川に流されていたのである。これらはもうりっぱに環境汚染といってよい事態である。それからさらに数世紀、19世紀には産業革命を迎え、今日でいうスモッグなどの問題も少しずつ出てはくるが、それよりは当時はむしろ主に先進国での話であるが、人間の生活水準は飛躍的に向上し、その原動力となった産業技術の発展を嬉々として賛美していたのだ。同時に人間の精神世界も次第に複雑なものに変化していったとはいうものの、当時の環境に対する配慮や然るべき対策は微々たるものだったといえるだろう。繰り返しになるが、そんな時代の状況をクラウディウスの一編の詩で括ろうなどという試みはなんとも不行き届ききわまりないばかりか、無謀でさえあることは承知の上であるが、この頃まではこと環境に関しては、総じてまだまだ「平和」な時代だったといえることができるのである。

3. ドイツ詩における環境保護意識の展開 —— 環境と詩

すでに見てきたように、20世紀半ばを過ぎると環境の問題は一挙に急展開し、化学薬品や核開発その他の高度に発達した科学技術により、生態系の破壊やオゾンホールによる温暖化、さらには遺伝子組み替え食品、はたまたクローン牛を越えクローン人間まで作り出されようかというようなさまざまなおぞましい問題が続出し、人間の存在・存続すら危ぶまれるような状況に追い込まれることになる。そんな状況を背景に、ドイツの自然をうたう詩にも急激な変化が訪れる。そんな変化を象徴する詩をいくつか紹介してみたい。

Schöne neue Welt¹⁷⁾

美しき新しい世界

Sonneneinstrahlung genormt

太陽の光の差し込み方は規格化され一定に

Wolken in den Himmel gestanzt

雲は空に型押しされたようにはめ込まれている

Bäume und Sträucher nach Katalog	樹木や茂みはカタログにずらりと並んでお望み次第
Gräser und Blumen wie echt	草も花もみな本物みたい
(ihr Duft kommt	(それらの香りは
individuell abstimmbare	それぞれに合わせて
aus der Sprühdose)	スプレー缶で吹き付けられる)
Regen und Unwetter sind	雨だって嵐だって
natürlich	もちろんのこと
auf Abruf gespeichert	ほしい時にいつでも降らせられるように溜めてある

この詩はブリギッテ・レットガース (Brigitte Röttgers) という女流詩人によって作られたものである。『美しき新しい世界』というタイトルとは裏腹に、そこで描かれているのは、すべてが人間の手によってコントロールされた「不自然な自然」である。彼女の叙述には批判的響きもなければ憤りもない。だれかに警告しているわけでもなければ危機感に襲われている様子でもない。ただ無機質な世界を淡々と描写しているだけである。しかし、そうした調子がかえって不気味さを増し、私たちが恩恵を受けているはずの現代文明に対して強い疑問を投げかけることに成功している。ちなみにこの詩の巧みさの一つは、特に最後から2行目に見ることができる。この行はたった1語〈natürlich〉で構成されている。ここでは「もちろんのこと」と訳したが、この語は英語の〈natural; naturally〉と同様で、本来は「自然の；自然に」という意味である。ところがそれまでに描かれてきた内容、そして最終行に至るまで「自然」なものは何一つないという皮肉が、この1語からなる行に凝縮されているのである。レットガースは1943年にケルンに生まれ、現在は主にベルリンとブレーメンでラジオや雑誌に詩を書いたりしているが、彼女がこの詩を書いたのは1976年のことである。折りしもこの年にはイタリア北部、ミラノ近郊のセヴェソという町の化学工場で爆発が起こり、あたりにダイオキシンが放出されるという大惨事が起きている。ダイオキシンについては今さら説明もいらないかもしれないが、当時は一般にはまだそれほど知られてなかった。この事故によって、この物質の毒性の強さが初めて認識されたといっていいたろう。少量でも皮膚が腐食し、内臓障害を引き起こし、発癌性もあるということで、この地域は一種のパニックに陥った。妊娠している女性の多くが、奇形で生まれるかもしれないという医者警告により墮胎した。また、当地の農業経営者の多くも土壌の汚染で操業を停止しなければならなかった。回復まで何年間も必要とした今

世紀最大の環境汚染事故の一つに数えられるものとなったのである。レットガースの詩がこの事故の前に作られたのか、後のことなのかは不明であるが、自然を無視した人間の営みがこのような事故を引き起こすことになるのだということを暗示しているような作品となっているのは偶然にしても興味深い。

人間と自然の折り合いがうまくいかず、なにかぎくしゃくしてきた時代を描く詩は他にも多数ある。ルートヴィヒ・フェルス (Ludwig Fels) の『しつらい』(Einrichtung)¹⁸⁾ という詩は、上のブリギッテ・レットガースの作品に先立つこと3年、1973年に作られたものだが、すでにレットガースの詩とほとんど同じ状況設定で、「作られた自然」のもつ薄気味悪さを巧みにひっぱり出している。

Du klebst die Walddapete an die Wand	君は壁に緑の壁紙を貼り、森の雰囲気を作り出す
ich ahme den Brunstscrei der Hirsche nach.	僕はさかりのついた鹿の鳴き真似をする。
Du sprühst Tannennadelspray	君はスプレーを吹き付けてモミの針葉を描く
ich blase Mooskissen auf.	僕はクッションを膨らまし、苔むす世界を作る。
Du schaltest das Tonband mit den Vogelrufen ein	君は鳥の鳴き声のはいったカセットをつける
ich gieße die Plastikblumen.	僕は合成樹脂の花に水をやる。
Noch trauen wir uns nicht	でも、小鹿に詰め物をして剥製を作ってみよう
ein Rehkitz auszustopfen.	という気には私たちは今のところまだなれない。

この詩に登場する「君」と「僕」は愛し合う二人であろうか、協力して愛の新生活を準備しているかのように見える。しかし、二人がそこでせっせと行っているのは、現代の科学(化学)技術を駆使しての見せかけの自然を作り上げようとする作業である。それは、現代社会における潤いのない干からびた生活を象徴しているといえる。1行の空白をおいた後の最終2行で、この二人「私たち」は初めて自分たちの行動に躊躇を見せている。ここにかろうじて救いの可能性が残されているといえるだろうか。

また、次のルートヴィヒ・フィーンホルト (Ludwig Fienhold) の『風景』(Landschaft)¹⁹⁾ も、現代がもつそうした殺伐とした状況を描いた一例である。

Ich liebe die saftige grünen	私は愛する、みずみずしく緑色の
insektenmittelgedüngten Wiesen	殺虫剤のばらまかれた草原を。
das ölige Plätschern der	私は愛する、泡立つ谷川の
schäumenden Gebirgsbäche	あぶらぎったせせらぎを。
die von Kohlendioxyd	私は愛する、炭酸ガスの
umwehten Kornfelder	吹き荒れる穀物畑を。
und das dumpfe Bersten	そしてまた私は愛する、水気を抜かれた
der entwässerten	ドイツ的なオークの木の
deutschen Eiche	鈍くひび割れたさまを。

ルートヴィヒ・フィーンホルトは1954年にダルムシュタットに生まれ、兄のヴォルフガングと共にフランクフルトで執筆活動をしている作家であるが、上の詩は先のフェルススの詩と同様1973年に書いたもので、彼が18, 19才の時の作品ということになる。この詩から「殺虫剤のばらまかれた」や「あぶらぎった」、「炭酸ガス」、「水気を抜かれた」、「ひび割れた」の語句を取り除くと平凡な内容にはなってしまうが、ドイツの豊かな自然を謳歌する抒情詩の伝統に連なる作品ということになるだろう。しかし、その「緑の草原」には殺虫剤がばらまかれており、「谷川」には油が浮いている。また、「穀物畑」には炭酸ガスが吹き荒れていて、ドイツを代表する樹木「オーク」は「力」や「不滅」を象徴するものであるというが、それがここでは哀れにもひび割れてしまっている。こうした一見矛盾した風景を対置した上で、作者はそれを「愛する」といっている。ここにこの詩の面白さがあるということが出来るだろうが、作者のその風景賛美はなんとも皮肉な響きで、ほとんど自嘲的なものにすらなっている。

ドイツ人は森を愛する民族とよく言われる。そして、上の詩ではオークの木がその象徴となっており、しかもそれが損なわれつつあるという描写で終わっている。1980年代に入ると、こうした詩と歩調を合わせるかのように現実の社会も動いていく。例えば、84年には、当時の連邦農林大臣のイグナツ・キーヒレ (Ignaz Kiechle) が、森林破壊に関する調査を10月16日ボンで発表している。それによると、当時の西ドイツで2本に1本の割合で樹木が損なわれているという結果が出た。その2年前の1982年にはまだ全樹木のたった8%の損傷であったものが、翌83年には34%と一挙に増大し、さらに84年には50%以上とたいへんな増加率となったのである。その損傷の内訳を見ると、樅の木が87%と最もひど

く、松（日本のものとは異なる）は59%、さらにブナやオークが続く。ドイツは国土の全面積のおよそ30%を森林が占めるが、その全森林の3分の1が軽度の損傷、16%が中程度の損傷、ひどく損なわれているか、すでに枯死の状態は1.5%ということである。この数値は損傷が90%を超えるイギリスやポーランドに次ぐほど深刻なものである。もっとも、イギリスの場合は森林面積は国土の10%しか占めていないから比較にならないかもしれないのだが。²⁰⁾

いずれにしても、森の破壊に対するドイツ人の感覚は確かに敏感なものがある。詩の領域においても、それに関するものは多々ある。ここでは短いものを2つほど挙げて済ませようと思うが、「森とドイツ人」という対置は今後の興味深いテーマになるかもしれない。

森に関する最初の詩を挙げよう。それは1948年、バート・ホンブルク生まれのウリ・ハルト（Ulli Harth）の『吟味』（Sichtung）²¹⁾という詩である。1969年の作品ということである。

Erst konnte man den Wald	そもそもは木を見て
vor lauter Bäumen	森を見ることができない
nicht sehen.	だけのことだった。
Dann sah man den Wald	その後、森はもはや
nicht mehr, weil alle Bäume	まったく見えなくなった。というのも
geschlagen wurden.	木という木がすべて切り倒されてしまったから。
Jetzt sieht man am Beton	今見ることができるのは、コンクリートのために、
daß hier niemand mehr	ここではもうだれも草が生えてくるのを
das Gras wachsen hört.	感じとことができなくなってしまったという事実だけ。

「木を見て森を見ず」とは、もともと細かいところだけ見て大きいところを見ないという、大局的な見地の重要さを教える諺であるが、この詩においては単なる諺であるはずの言葉が、言葉の上だけの問題ではなく現実的な問題として重くのしかかってくる。諺では森はまだ厳然として存在し、ただそれを「見ない」だけであるのに対し、詩の方ではもはや見たくても「見られない」状況が描かれている。森は皆伐され、「自然」はコンクリートに固められ、もう生身の感覚では捉えることができない。それが現代文明の中で生きる私たちの生活だということだ。

次の作品はハラルト・クルーゼ (Harald Kruse) という人の『都市化』(Verstädterung)²²⁾ という詩である。クルーゼは1945年ヴァスベックに生まれ、ノイミュンスターに暮らす詩人で、詩は1974年のものである。

Was	どういうことに
wird	なるのだろう
wenn	もし
Spechte	啄木鳥
an	が
Telegraphenmasten hämmern?	電信柱ばかりを突つくようになったなら?

内容的にはくどくどした説明はいらない詩である。「森の絶滅」に対する不安を単刀直入に訴えたものといっていだろう。形式の方からみると、最初の5行が1語で、最終行のみが2語で構成されていることがまず目を引く。そして、その初めの3行はいずれも<w>、つまり英語の<v>に当たる音で始まっている。音に対する感覚は各人異なるものであろうから、決めつけたようなことは言えないが、個人的にはこの<ヴァス>、<ヴィルト>、<ヴェン>という音は暗い響きで、何かざらざらした感じを受ける。そして、それに「啄木鳥」の<シュベヒテ>という明るく歯切れのいい音が続く。次の行の<アン>も明るい音である。一縷の望みを感じさせる部分である。しかし、そのすぐ後、つまり最終行では「電信柱」の<テレグラフェンマステン>、「突つく」の<ヘンマーン>というくすんだような、よどんだような音が2語も続く。この2語によって淡い期待が見事なまでに裏切られる効果は優れたものといっていだろう。さらに同じ部分であるが、「啄木鳥」と「電信柱」は、先の詩と同様、文字どおり「自然」と「文明」の対置であり、音の相違とあいまって、失われていく自然、ここでは森の喪失というテーマが強烈に表現されている。

先にも述べたように、ドイツにおける森の枯死は1980年代初頭に増大するが、この原因となったのは石炭やオイルの燃焼から発生する二酸化硫黄と排気ガスの酸化窒素である。これが樹木を害する雨、いわゆる「酸性雨」を降らすことになる。ドイツはこうした大気汚染をなんとか食い止めようとして、硫黄除去装置や自動車の排気ガス浄化装置を設置したり、スピード制限を取り入れるなどの対策をいち早く取ったのである。とはいうものの、

ドイツの森林保護がその後順調にしているかという点必ずしもそうではないと言わざるをえないようである。ドイツの森の名前ですぐに出てくるのシュヴァルツヴァルトであり、それは「黒い森」という意味である。その名前からは、樹木が黒々と鬱蒼と生い茂った自然豊かな森が連想されるが、このシュヴァルツヴァルトの森林事情も決してかんばしいものではないことを以前テレビのドキュメンタリーで見たことがある。ドイツでは非常に尊敬されている職業であるという営林署員が、森の枯死を必死になって押えようと努力しているが、現実はその逆で、いずれは一本の樹木も残らない時期がやってくるという悲観的な感想を寂しそうに述べていた映像が記憶にある。

4. ドイツ詩における環境保護意識の展開——環境と詩（続）

さて、環境というのは「まわりの世界」であり、ドイツ語の〈Umwelt〉もまったく同様の意味である。考えてみればこの言葉自体、以前は人間ばかりでなく、あらゆる動植物を取り囲む「まわり」の世界であったのが、いつのまにか人間のみものものとなってしまった感がある。いわばこの言葉は今や人間中心の世界観から成り立つものになってしまったといえるだろう。それはそれでおくとして、その環境を構成する3大要素は「水」であり「空気」であり「大地＝土壌」である。1936年コーブレンツに生まれたエルケ・エールトゲン（Elke Oertgen）は、デュースブルクで短編の散文や詩を書いている作家であるが、彼女は1980年に上の3大要素をそのままタイトルにした詩の3部作を残している。いずれも40～50行のかなり長いものなので、ここで紹介することは断念するが、それぞれの詩において、私たち人間にとってかけがえのない要素が汚されることを嘆き、また、それを何とか清浄に保とうとする訴えが切々とした調子でうたわれている。水も空気も土壌も、太初時代と比べると、現在はすっかり変わり果てた状態になっているのである。以下はそのエールトゲンの3部作の中の『空気』²³⁾の最後の3行である。

Nichts brauche ich zum Leben	生きるために私は
mehr	汝以外のなにものも
als dich.	必要とはしない。

ここの「汝」とは「空気」に対する呼びかけであるが、彼女のその叫びは「水」に対しても「土壌」に対しても向けられているとっていいだろう。彼女の3部作はこんなふう

に、他の何もかも取って代わることのできない「まわりの世界」、環境に対する賛歌であり、また今も刻々と汚され、損なわれている環境に対するレクイエムとなっているのである。

すぐ上で述べたように、「水」も環境の重要な一要素である。ドイツには海は北部の北海とバルト海しかなく、ドイツ人の多くが水と聞いて連想するのは、それよりもライン川やエルベ川、ドナウ川などの河川ではないだろうか。1986年はあのチェルノブイリの原子力事故の年であり、この事故によって数百人の死者が出て、旧ソ連一帯が激しく汚染され、さらに広くヨーロッパ全体に被害を及ぼしたが、この同じ年にドイツ、正確に言うならスイスでは、ある化学工場の大火災が起これ、その消化水とともに有毒の化学物質がライン川に流れ込むという事件が起きている。その有毒の化学物質とは「植物保護薬剤」と訳すことのできる一種の農薬であり、この物質のライン川への流入により、川の動植物相、生態系が死滅寸前になったという。この事故はドイツでは一般に、化学工場の名前をとって「サンドス火災事故」と呼ばれている。²⁴⁾ ライン川はスイス東部に源を発し、北に流れてボーデン湖にいったん注ぎ込み、そこから西へドイツとスイスの国境沿いに流れ、途中再び北に流れを変え、フランスとドイツ国境沿いをいった後ドイツに入り、ドイツ西部地域を貫いた後、オランダを通過して北海に注ぐ全長1320kmのドイツ最大の川、ヨーロッパにとって最も重要な河川の一つである。この事故の影響は広範囲に渡り、スイス寄りの上流では深刻な生態系の死滅状態をもたらしたのはもちろんのこと、かなり下流でも川からの飲用水の井戸が閉鎖され、タンクローリーで代替りの飲用水が供給されたということである。スイスに端を発したこのサンドス火災事故は、皮肉なことにスイスよりむしろドイツに多大な被害を及ぼしたことになり、ライン川の正常化、回復にはその後数年を要したが、有毒な化学物質の容易ならぬ危険性をまざまざと見せつけた象徴的な事件だったことになる。化学物質が特に飲用水に及ぼす危険性は、もちろんこの事故以前にも強く認識されていたわけであるが、次の詩にはそのへんの様子がさりげなく、しかし的確に表現されていると思う。すでに例として一つ挙げたルートヴィヒ・フィーンホルトの詩で『污水 (Abwässer)』²⁵⁾ というタイトル、1973年の作である。

Als ich gestern einen Schluck
Leitungswasser trank
schmeckte er recht süß

昨日、水道の水を
一口飲んだ。
かなり甘い味がして、

und war viel bräunlicher	いつもより
als sonst	ずっと茶色みを帯びていた。
schäumte auch etwas	しかもなんだか泡立っていて、
fast wie Coca Cola	それはもうコココーラみたいだった。

ライン川はオランダから北海に注ぐと言ったが、その北海はドイツ側にも接している。そして、その沿岸にはドイツ語で〈ヴァッテンメーア (Wattenmeer)〉という一種の干潟、砂州があり、そこはさまざまな種類の生物が生息し、生態系の宝庫とも言える場所である。ペーター・シュット (Peter Schütt) はその『所有関係 (Besitzverhältnisse)』²⁶⁾ という詩において、〈ヴァッテンメーア〉の大切さを切々と訴えている。

Das Wattenmeer	北海沿岸の
an der Nordseeküste	干潟
gehört weder der Bundesrepublik	それはドイツのものでも
noch Holland oder Dänemark,	オランダのものでもデンマークのものでもない、
es gehört nicht der ESSO	それは エッソ (ESSO) のものでも
und nicht der BP,	ベーパー (BP) のものでもない。
es gehört einzig und allein	それはただただひとえに次のものたちのものである、

詩人はこの詩を以上のように始め、以下ではそこに生きる生物の名前を10数行にわたり次々と挙げている。そこには私たちの知らない名前も多く出てくるが、例えばオバシギとヴァット・カタツムリ、ムールガイとイガイ、カニとコエビ (シバエビ、クルマエビなど)、カジカ、カレイとニシン、キュウリウオとトゲウオ、シュプロッテ (ニシン属) とシタビラメ、アザラシとハイイロアザラシ、オオカミウオ、シジュウカラガンとケワタガモ、タカシギ (ソリハシセイ) とチドリ、カモメとアジサシ (鳥) といった具合である。そして、最後を以下のくだりで閉めている。

es gehört dem Vogelschutzwärter	それはシャルヘルンの
von Scharhörn und den keuschen	野鳥保護監視員のものであり、また汚れを知らぬ
Nackedeis von Sylt, und ich	ジルトの裸ん坊たちのものである。そして私は

plädiere entschieden dafür,	断固として支持する、
an diesen Besitzverhältnissen	こうした「所有関係」を
nichts zu ändern.	いっさい変えることのないことを。

初めに出てくる「エッソ」と「ベーパー」はいずれもハンブルクにある鉱油会社である。「エッソ」の名前は日本でもよく知られているが、「ベーパー」は、その親会社としてブリティッシュ石油カンパニーというイギリスの会社をもち、天然ガスや鉱物なども扱っている大会社である。

また、詩の最後の部分では〈ヴァッテンメーア〉の所有権は上に挙げた生物たちにあり、またそれを守ろうとする人間、および利益とは関係ない素朴な人間のものであることを冗談っぽい表現をまじえて訴えている。先に生態系の宝庫と言ったが、この〈ヴァッテンメーア〉の重要性は国も認識しており、1985年にシュレースビヒ・ホルシュタイン州の2850平方kmに及ぶ〈ヴァッテンメーア〉を国立公園に指定したのを皮切りに、翌86年にはニーダーザクセンの〈ヴァッテンメーア〉(2400平方km)、1990年には117平方kmという小さいものではあるが、ハンブルクのそれを同じく国立公園に指定して、保護しようとしている。²⁷⁾しかし、国の取るこうした対策は、どこの国でもたいていは同じで、後手後手にまわるケースが多く、この〈ヴァッテンメーア〉の保護もまず何らかの破壊、汚損が生じた後のことである。

私たちは二つの「エコ」をもっている。一つは「エコロジー」であり、もう一つは「エコノミー」である。私たちが生きていくためには、まずもってエコノミーを優先させていかねばならない。しかし、経済ばかりを優先させることは、エコロジーをないがしろにすることを意味する。エコロジーが軽視されると、私たちは単に「食っていく」という意味ではなく、自然の中で真の意味で生きていくための条件が損なわれることになる。人間が地球に君臨するのであれば、この二つのエコのバランスを責任をもって保っていかねばならないだろうし、現在はむしろエコノミーよりエコロジーを優先すべき時代だと言うべきではないか。それほど環境が危機にさらされ、必要以上に営利のみが追い求められている時代であることを今こそ肝に銘じるべきである。

5. ドイツ・ポップスの中の環境

ここでは最後の例として、ドイツでは音楽の世界、それもポップスの世界でも環境が取

り上げられ、歌の形で人々にその問題が訴えられていることを見ておきたい。まず初めに挙げるのは、ディー・プリンツェンというグループの歌の歌詞である。このグループについては以前本論集で取り上げたことがある²⁸⁾ので詳しい説明はしないが、旧東ドイツ出身で、ドイツ全土で非常に人気を博したグループである。しかし、数年間トップグループの中で常に全力で突っ走ってきた反動で、現在はほとんど活動停止状態にあるらしいことだけを述べておく。このプリンツェンの歌に『工場長 (Betriebsdirektor)』²⁹⁾というのがある。

Wenn uns're gold'ne Sonne	私たちの素晴らしい太陽が
hinter eine Wolke kriecht,	どんよりとした雲のかげに隠れてしまい
und diese Wolke duftet	そしてこの雲からは、ごくかすかながら
ganz dezent nach Schwefeldioxid,	二酸化硫黄の臭いがしている。
dann frag' ich den Betriebsdirektor:	そこで私は工場長さんにこう尋ねる:
Bitte sag' mir, muß das sein?	あなた、このままでいいなどと思ってないでしょうね。
Also schalte doch	だったら、これからはフィルターを設置して
in Zukunft deine Filter ein!	きちんと濾過してくださいよ!

Wenn unser gold'ner Mond erst merkt:	私たちの金色の月がまず気づく:
Hier muß doch 'was nicht stimmen,	ここは何かがおかしいと。
weil die vielen kleinen Fischlein	だってかわいい魚がたくさん
alle auf dem Rücken schwimmen,	お腹を上にして浮いているのだもの、と。
dann frag' ich den Betriebsdirektor:	そこで私は工場長さんにこう尋ねる:
Bitte sag' mir, muß das sein?	あなた、このままでいいなどと思ってないでしょうね。
Also schalt' doch	だったら、浄化装置にスイッチを入れて
deine Kläranlage ein!	きちんときれいな水にしてくださいよ!

Wenn unser gold'ner Abendstern	私たちの輝く夕べの星が
aufs Kieferwäldchen schaut,	松の森に目を向けて、
und anhand der kahlen Bäume sieht:	その禿げ上がった裸の木々を見てわかるのは、
Hier ist irgendwas versaut,	ここでは何か汚されて台無しになっていること。

dann frag' ich: Wer ist der Direktor,	そこで私はこう尋ねる：所長は誰なのか、
wer ist hier so krank?	ここでこんなにも病んでいるのは誰なのか？
Soll das so weitergeh'n?	この先こんな状態が続いていっていいものなのか？と。
Nee, vielen Dank!	とんでもない、そんなのまっぴらご免というものだ！

ここではもう歌詞の詳しい説明はしない。ゆっくり読んでもらえば、それですぐに理解できるものと判断したからである。一つだけ言っておくとすれば、この歌詞は非常に素朴なリズムで作られており、ポップスとはいいながらほとんど昔ながらの民謡のような詩になっているということである。もちろん、そこで取り上げられている内容は昔の民謡とは異なり、現代の環境汚染に対する皮肉に満ちた警告である。この詩と曲を作ったのは、このグループの5人のメンバーの一人、ゼバスティアン・クルムビーゲル (Sebastian Krumbiegel) であるが、彼はその際、ドイツのある古い民謡を意識しているように思える。それは『星いくつ出てる？ (Weißt du, wieviel Sternlein stehen?)』³⁰⁾ という民謡である。詩も曲もこの民謡を連想させるもので、曲はここでは示しようもないが、詩の方は以下のようなものである。

Weißt du, wieviel Sternlein stehen	青いお空に
an dem blauen Himmelszelt?	星はいくつ出てる？
Weißt du, wieviel Wolken gehen	はるかなるこの世の上空を
weithin über alle Welt?	雲はいくつ流れてる？
Gott der Herr hat sie gezählet,	それらが一つもなくならないように
daß ihm auch nicht eines fehlet	主なる神様が数えてくれる
an der ganzen großen Zahl,	それはたいへんな数だけど
an der ganzen großen Zahl.	それはたいへんな数だけど
Weißt du, wieviel Mücklein spielen	焼けつくような太陽のもと
in der heißen Sonnenglut?	虫たちはいくつ飛んでいる？
Wieviel Fischlein auch sich kühlen	澄んだ川の流れの中
in der hellen Wasserflut?	魚は何匹すずんでる？

Gott der Herr rief sie mit Namen,	それらみなが生氣を取り戻すように
daß sie all ins Leben kamen,	主なる神様が名を呼び挙げてくれた
daß sie nun so fröhlich sind,	それで今ではみな楽しそう
daß sie nun so fröhlich sind.	それで今ではみな楽しそう

Weißt du, wieviel Kinder frühe	朝早くにベットから起き出す
steh'n aus ihrem Bettlein auf?	子供たちは何人いる？
Daß sie ohne Sorg' und Mühe	みなが何の憂いも心配事もなく
fröhlich sind im Tageslauf.	一日楽しくすごせるように

Gott im Himmel hat an allen	天にまします我らが神はみなに
seine Lust, sein Wohlgefallen,	その喜びと満足を分け与えてくれる
kennt auch dich und hat dich lieb,	君のこともちゃんと知っていて
kennt auch dich und hat dich lieb.	君のことを愛してくれる

長い詩であるが、すべてを挙げてみた。読んでみるとわかると思うが、これは先に挙げたクラウディウスの『月が昇った』ときわめて似た詩である。空や星、雲や太陽、虫と魚、人間の代表として出てくる「子供たち」、すべてがごく自然で、健全な状態である。そして、そういう健全な状態を保ち、また支えてくれるのは神であるという図式である。この詩を作ったのはヴォルフガング・ハイ (Wolfgang Hey) という詩人で 1789年に生まれ、1854年に亡くなった人であるが、この詩は1836年のものであるという。また、曲の方は1759年の『おお、汝ドイツよ (O du Deutschland)』という歌のメロディーを使っている。このことからわかるように、クラウディウスの『月が昇った』は18世紀、この歌はそれから50～60年後の19世紀の作品である。そして、これは民謡であると言ったが、ドイツの子供たちに広く歌われ、愛されている童謡といってもいいだろう。『月が昇った』と同様、ここには環境破壊のかけらもない。自然と人間と神が三位一体となった理想郷としての地球が歌われているのである。

次は、ウド・リンデンベルクである。この歌手についても、本研究論集で以前2度に渡り取り上げた。³¹⁾すでに人気は衰えたが、今ではドイツ・ポップス界の大御所である。このリンデンベルクの歌になんと上の童謡とまったく同名の『青いお空に星いくつ出てる？

(Weißt du, wieviel Sternlein stehen an dem blauen Himmelszelt?)』³²⁾ というのがある。少々長くなるが、ここでは再びそのすべてを掲載したいと思う。それは詩の内容を上
の童謡の詩とよく比較してほしいからである。

Weißt du, wieviel Sternlein stehen an dem blauen Himmelszelt?	青いお空に 星いくつ出てる？
Keine Sterne mehr zu sehen, schwarzer Himmel, finstre Welt. Nur der Schwefelmond hängt so fahl Über Wäldern tot und kahl.	星なんか全然見えやしない 黒い空、暗闇の世界 ただ硫黄のような月がどんよりと 皆伐された死んだ森の上空にかかっているだけ
Weißt du, wieviel Wolken ziehen an dem düstern Himmelszelt? Weißt du, wieviel Ströme fließen in das Meer am weißen Strand?	ほの暗い空に 雲はいくつ流れてる？ 白い渚の海へ 川はいくつ流れ込んでいる？
Wo die Killeralgen sprießen, treiben Tiere tot ans Land. Wo die Sonne uns verbrennt durch ein Loch im Firmament.	有毒な海草が生えるところでは 海の動物たちが死んで陸に流れつく 天空を突き破る穴から 太陽が私たちを焼き焦がす。
Weißt du, wieviel letzte Chancen wir noch haben bis zum Schluß?	終わりの日が来るまでに私たちには あといくつのラストチャンスがあるの？
Nun schlaf doch endlich ein, mein Kind! Ich hoffe, heute nacht wirst du nicht wieder schreien, mein Kind, von schlimmen Träumen aufgewacht.	さあ、わが子よ、もうお眠り 今夜はおまえが悪い夢に 目を覚まし、また泣き叫ぶことが ないように願っているよ。

Weißt du, wieviel Kinder spielen
überall auf dieser Welt,
die nicht wissen, wohin rennen,
wenn die Bombe vom Himmel fällt?

爆弾が空から降ってきたとき、
どこへどう逃げたらいいかわからない
そういう子供たちが
この世界に幾人いる？

Und sie werden irgendwo heute nacht
in so 'nem Wahnsinnkrieg eiskalt umgebracht,
und ein andres Kind so alt wie du,
kriegt vor Hunger die Augen nicht zu.

そんな狂気の戦争の中で子供たちが
今夜もどこかで冷酷にも殺されていく
空腹のあまり目も閉じられないでいる
おまえと同年くらいの子供もいるんだ。

Nun schlaf doch endlich ein, mein Kind,
und wenn du heute nacht wieder weinen
wirst und schrei'n, mein Kind,
von schlimmen Träumen aufgewacht.

さあ、わが子よ、もうお眠り、
今夜もまたおまえが
悪い夢に目を覚まし
泣き叫んだりするのなら

Dann laß uns nicht erzählen,
wieviel Sterne da so steh'n.
Dann laß mal lieber machen,
daß wir hier nicht untergeh'n.

いくつ星が出ているかなんて
私たちに語らせないで、
そして私たちがここで滅亡したり
しないようにしなけりゃね。

リンデンベルクは童謡の歌詞とメロディーを巧みに利用しながら、現代の世界の問題点を象徴的に表現することに成功している。それはやはり環境汚染、環境破壊に対する警告であり、また、第3世界、発展途上国の惨状への洞察である。童謡の方の詩が平和で、落ち着きをもち、神という見えないが強い支えがあったのに対して、あるいはそうであるがゆえに一層、リンデンベルクの詩はそれとは正反対に不安を呼び起こすものであり、神の存在もまったく考えられておらず、いわばニヒリスティックに放り出された現代の私たちのどうにも不安定な状態が浮き彫りにされるものになっている。ここでは、こうしたすぐれた詩がドイツにおいては、ポップスという日本では軽視されがちな、そして実際日本のポップスは軽視されて然るべき内容の歌詞がほとんどなのだが、そうしたジャンルの中にも存在することだけを付け加えて、もうそれ以上のことは言わない。童謡とリンデンベルク

クの詩をじっくりと比較して読んでみることを願うばかりだ。

6. 最大の環境破壊

有名なゲーテの詩に『魔法使いの弟子』³⁹⁾ というのがある。この詩はジャンルとしては〈Ballade〉といい、日本語には和製英語的に「バラード」とか「譚詩」あるいは「物語詩」などと訳されている。つまり、詩の細かい構成や韻律もさることながら、その内容、物語的なストーリーにより重きが置かれている詩といえる。日本ではゲーテ作の詩よりも、それをもとにフランスのポール・デュカスという作曲家が作った同名の交響詩の方が有名になってしまったような感もあるが、もとの詩もなかなか興味深いものである。さて、ここでこの詩を持ち出したのは、本論の冒頭に掲げたオイゲン・ロート作とされる例の4行詩と同様、この『魔法使いの弟子』はドイツの環境団体の冊子などに好んで取り上げられているのを何度か目にしたからだ。初めのうちはしばらくの間どうしてなのかわからなかったが、この詩のストーリーをたどってみるとすぐにその意図は理解できるものであった。全部で100行ほどのかなり長い詩なので原詩をそのまま載せることはしないが、どのような内容の詩なのかを簡単に説明しておきたい。

ある日、魔法使いの師匠が所用で外出した折に、弟子は今がチャンスとばかりに普段習っている魔法を試してみようと思いつく。暑い日なのだろうか水浴びをしたいというので、川から水を汲んでくるのが目的だった。水汲みはいつも魔法使いの弟子の仕事なのだろう。弟子は魔法でこの用事を楽に済ませようと思いつく。そこで、部屋の古ぼうきに師匠の呪文を見よう見まねで唱えてみる。するとほうきはまんまと立ち上がり、水瓶をもって川まで水を汲みに出かけていく。そしてまたたくまに水を汲んできて、部屋にある水槽、水盤に開けていく。このへんまでは大成功。しかし、様子がにわかにおかしくなる。弟子はほうきをもとに戻す呪文を忘れてしまったのだ。するともう大変。ほうきは弟子がいくら叫ぼうとも果てしなく水を汲んでくるので、家じゅうが次第に水浸しになってくる。どうしたらいいものかわからぬ弟子は気が動転し、ふと思いついてほうきを斧でまっぶたつにたたき割る。結果は最悪。割れた二つのほうきが立ち上がり、今度は2倍の勢いで水を汲み始める始末。大広間はみるみるうちに水がたまり、階段も一段また一段と水をかぶっていく。魔法使いの弟子はもうまったくのお手上げ。いつ現われるかも知れぬ師匠に助けを求めて叫ぶこと以外何もすることができないでいる。するとそこへ運良く師匠が戻り、弟子から事情を聞き、すぐさま次の呪文の言葉を唱え、ことは一件落着する。

In die Ecke	隅に退け
Besen! Besen!	箒よ 箒
Seids gewesen.	汝ら本来 箒なり
Denn als Geister	何故ならば汝らを霊として呼び出し
Ruft euch nur, zu diesem Zwecke,	その目的に供し得るは
Erst hervor der alte Meister.	ただ練達の師あるのみなれば ³⁴⁾

一般に詩というものはさまざまな解釈が可能であり、仮に作者がある明確な意図、イメージのもとに作ったものだとしても、いったん出来上がってしまった後は、作品は作者から離れていく。ここでも事情は同様で、ゲーテの頭の中にはもちろん何か明確なイメージなり意図があり、それによってこの詩が作られたことはいうまでもない。しかし、作品が一人歩きし始めると、その解釈は必ずしも作者の意に沿うものでなければならないということはない。それはもちろん作者を無視するというのではなく、むしろ詩というものがもつ優れた点なのだと思う。言い換えるなら、複数の解釈の可能性が残される、時には無限ともいえるような多様な解釈が可能な作品こそ優れた詩ということができるのである。

このような可能性を十分承知した上で、この詩についてあえて一つの解釈を行なってみるならば次のようなことになるだろうか。それは上に挙げた詩の最後の部分、魔法使いの師匠が騒ぎを収めるために唱えたこの6行に、この詩の意図が凝縮されているのではないかということだ。魔法使いの弟子が不用意に呼び出して、ほうきに吹き込んだ「霊」に対して、戻ってきた師匠はまずほうきを本来のほうきに戻す。そして今度は、ほうきに乗り移り、ほうきと一体となった霊に対し、それらを本当に正しい目的で導き出すことができるのは、十分に修養を積んで奥義に達した者だけなのだという。ゲーテはつまり、ろくな見識もない未熟者が軽はずみな行動を取るととんでもない事態を招きかねない、そしていったん招いた深刻な事態の收拾は容易なことではなくなり、相当な経験を積んだ者にしか解決できなくなるということ、普遍的な見地から教諭しているように思えるのだ。

ここまでくると、現在私たちが取り扱っている環境という個別的な問題についても、この詩が実に興味深い関わりを持って来る。すでに見てきたように、空気を水を大地をやりたい放題に汚し破壊している私たちは、呪文のかけ方を少しばかり覚え、いささか慢心した魔法使いの弟子の姿に似ているのではないだろうか。そう考えると、そんなふう人間が手を加えている自然ないしは環境がほうきということになるだろう。だとすると、私た

ち人間は、ほうきをもとの状態に戻す呪文を知っているのだろうか。仮に知っていた時期があったとしても、いつのまにか忘れてしまっている状態が今の人間ではないのだろうか。はたして、ほうきは現在私たちの言うことをまだ聞いているといえるのか。あるいは、ほうきはもしかするとすでに私たちの手におえない状態に入りつつあるのではないか。いづれにしてもそのうちに私たちの思いもよらない手痛いしっぺい返しを自然・環境から受けることになるかもしれない。

また、私たち人間は魔法使いの弟子ではなく、魔法をかけられたほうきの方であるという解釈もおもしろい。ただしこの場合は、ほうきである人間は誰に呪文をかけられたのか、つまり魔法使いの弟子はいったい誰なのかという問題が残りはする。しかし、誰の言うことにも耳を貸さず、一心不乱に水を汲み、もうたくさんという状態にもかかわらずひたすら同じ行為を繰り返す姿は、無駄に無駄を重ねている人類の現在の姿になんと似ていることであろうか。そして、詩の中ではいずれ帰ってくることになる師匠は、実際には存在するのであるか。存在するとしたらそれは何なのか。あるいは、師匠なるものがいたとして、その呪文によって我に返ることになる人間には、そのときいったいどのような状態が残されているのか。そのとき、魔法にかけられる以前の状態が回復されているという保証は現実にはないのである。

こんなふうに『魔法使いの弟子』の詩ではいろいろな仮定が立てられ、現在の私たちの行いや置かれている立場を、それに応じていろいろに空想することができる。ここではもう一つだけ言っておきたいことがある。この詩は魔法使いの師匠の言葉で終わっているので、先のストーリー説明では師匠が「呪文の言葉を唱え、ことは一件落着する」と書いたのだが、本当に一件落着したのかどうかについては実は詩では描かれていない。つまり、師匠の最後の呪文も効かなかったという続編を想定することもできるのである。この場合は上の二つの解釈の可能性のいずれであっても、その後の地球・世界の状態がどんなものになってしまうのかということについては、いっそう想像が難しくなり、ただただ暗澹たる気持ちのみが残ることになるのである。

さて、話題を少々変える。環境破壊にもいろいろあるが、その最大のものはなんといっても戦争であろう。ことに20世紀に入ってから戦争はさまざまな核兵器や化学兵器の開発を促すことになり、その使用が環境の破壊に直接つながっていく。それと同時に大都市の貴重な施設を破壊し、人間の住居をもはや居住不可能なほどに打ち崩し、そしてまた森林を焼き払い、田畑を荒らし、その土地の人の食糧を奪ってしまう。こんなふうに、それ

まで人間が長い時間をかけて営々として築き上げてきたありとあらゆるものを、一瞬のうちにといていいほどの短期間に無に帰せしめてしまうのが戦争である。これほど非生産的・破壊的で、むなしい営みは他にはない。しかし、人間というものはこれまで、その戦争をむしろ好んで繰り返してきたとしか思えない。それは人類の歴史を振り返ってみれば一目瞭然であろう。短い期間の平和と平和の間には必ず戦争があり、また、仮にある地域は平和であっても、他のどこかの地域では紛争が繰り返されている。地球上がすべて平和におおわれたことなどないのではないかと思われるほどである。そして、第2次世界大戦以降、その主導権を握ってきたのはアメリカである。第2次大戦の広島・長崎への原爆投下はいうまでもなく、それ以降もアメリカは朝鮮戦争、ベトナム戦争に始まって、イラク空爆、ボスニア・ヘルツェゴビナ問題、最近のコソボ紛争など世界のいたるところに出かけて行って、最新技術の兵器と戦略で騒ぎを鎮圧しようとする。その際、アメリカは常に正義であり、世界の平和のために身を賭して敵に立ちはだかる。それはまるで自分たちが「魔法使いの師匠」、さらに言ってしまうえば、世界を統べる神であるかのような起居振舞いである。しかし、そこで行われているのは、ただ国力に物を言わせ、爆弾やミサイルをこれでもかというほど使用して敵地を攻撃することでしかない。にもかかわらず、そうしたアメリカの動きを世界の他の国々は、ただ指をくわえて見ているだけか、それどころか時にはその行動をほめたたえさえする。現在の様子を見ると、こんなふうにアメリカ主導で世界が動いていることがわかるが、過去の人類の歴史は多かれ少なかれ、今のアメリカ同様、どこかの大国が他国を圧倒し、おのが思うままに統べていこうという覇権争いであったといえる。それは考えてみれば人間が持つなんともおろかな衝動的欲望であると言わざるをえない。兵器の開発のために多額のお金をかけ、さらに言うならそんなお金などというものと比べたらはるかに貴重な資源を使う。そして、その実験のために環境を荒らす。さらには、実際の使用によって人命を奪い、また環境を破壊する。こうした行為の繰り返しに対しては、もういいかげんにしてくれ、というような叫びしか出てこないのが正直なところである。

まとめに代えて

ドイツの詩に見られる環境の問題、ドイツ人の環境保護意識をずっと追ってきたが、本論を書いている折りしも、茨城県は東海村でJCOという核燃料加工会社の放射能漏れ事故が発生した。このところほとんど連日のように新聞紙上をにぎわしているが、これは臨

界というこれまではほとんど聞きなれなかった名称が付せられ「東海村臨界事故」という名前で歴史に残ることになりそうだ。だが、この大事故の合間にもベンゼンによる大気汚染の問題やすでに以前から取り上げられているダイオキシンの問題なども記事として新聞に取り上げられている。こうした現状を前にして、筆者はなすすべもなく毎日を送っている。そんな中、頭をよぎるのは例えばこんなことである。前章で取り上げたゲーテの『魔法使いの弟子』では、最後の最後に師匠が帰ってきて、すべてを元どおりにしてくれ一件落着くという解釈で一応は終わるが、もし現代の私たちが魔法使いの弟子であるとするならば、その窮状を救うべき師匠とはいったい誰であり何であるのだろうか。また、それはいったいどこにいるのだろうかといえるのか？

私たち人類はその地球との関わり方、環境との付き合いという点で、四面楚歌というべきか、八方ふさがりというべきか、もうほとんど逃げ場のない状況に追い込まれている。環境に関する本をどんなものでもいい、手にとってみればわかるだろう。そこには例えば「温暖化、酸性雨、砂漠化、土壌流出、熱帯林消滅、生物絶滅、海洋汚染、廃棄物、エネルギー危機、人口爆発、貧困・・・」。地球が抱える問題群は、複雑にからまっている。あちらを立てれば、こちらが立たず。地球の多元方程式を解くのは至難の業である。未知数の数が多すぎるのだ。」³⁵⁾ こんな具合に、現在私たちが課せられている深刻な問題がたちどころに羅列され、私たちはそれらに対してどう身を処していくべきなのかわからず、ため息まじりに現状を嘆くか、あるいはただただうろたえるばかりというのが正直なところだ。もちろん、各国レベルで、つまり先進国、途上国それぞれに、あるいはまた国際的レベルで、新たな法律や規制、議定書、協定を結ぶなどさまざまな対策が取られてはいる。しかし、それらの存在はむしろ、そういうものを作らなければならない背景、現実的には上述の引用にあるようなさまざまな問題の重大さを際立たせるばかりであるかのようだ。私たち人間の営みはもう本当に来るところまで来てしまったのではないか。さらに適度の「豊かさ」ばかりか、必要以上の「便利さ」を追求してきた現代文明は、来てはいけないところにまで足を踏み入れてしまったのではないだろうか。そのつけの一つが今、環境問題という形で私たち現代に生きる人間に突きつけられているといえる。それに対して、多くの環境に関する専門家、あるいは書物においては、「嘆いている」ばかりではいけない、「うろたえている」だけではだめだ。山積みされている環境問題を克服できるような具体的な行動をとらなければならない、というようなことがこれまた例外なく言われる。それはまさしくその通りだとは思ふ。では、その「具体的な行動」とはどんなものなのか。これに

についても、もはや現在のような進歩思想、発展思想にのっとった行動では成り立っていかないと個人的には考える。

ここ日本でもつい何十年か前までは、質素をよしとする生活形態があった。それは言い換えるなら、人々の心の中に「もったいない」とか「贅沢だ」とかいう気持ちが単なる言葉としてではなく、一種の社会生活の約束として厳然と存在していたのだ。昔はこういう言葉を発しながら、近所の人がお互いに牽制しあい、警告しあいながら、ものを無駄にしないように生きてきた。それは社会が貧しかったからできたことであり、さらにいつか来る「豊かで便利な」生活のために一時的に辛抱してきただけだという人もあるだろう。しかし、私たちの生活形態が来るところまで来てしまった、来てはいけないところまで来てしまったのだとすれば、今こそそういう考え方、姿勢が求められているといえる。そうするとまたすぐにこんな声が聞こえてきそうだ。「そんな消極的な解決案ではいけない。問題をもっと科学的に分析していけば、必ず窮状を脱する解決策があるはずだ。」事実、これまで何かある問題が出てくると、その都度それに関する多くの資料が集められ、専門家により統計などの形で分析され解決策が打ち出された。また、危険とされる化学物質があれば、それを代替する物質が発見されるか開発され、これでもう大丈夫、という作業が繰り返し行われてきた。こうした作業こそ科学的発展なのかもしれない。だが、どんなものなのだろう。そうした学者や専門家のありがたい新説や発明は、少なくともこれまでのところ一時的な打開策でしかなく、問題をいっそう複雑なものに、深刻なものにするだけだったとはいえないだろうか。それよりはむしろ、無駄なものを作らない、作ってしまったものは使える間は精一杯大切に使う、それが駄目になってしまった時には、なんとか修理できないものか考える。それでもだめな場合には、それをどんな形で処分するのが最も適当であるかを考える。これはドイツがゴミ対策として出した考え方を、生活全般にそのまま置き換えただけのものであるが、こうした基本的な考え方を法的規制なども強化することにより、一般的社会通念にまで高め、誰もがそれを例外なく当たり前のことと思うようにはならないものだろうか。そして、その社会通念のもとで人間が再び「質素で、貧しい」生活するということをあらためて考えなおしてみる意味が今だからこそあるのだと思う。それを実現するのはむしろ並たいていのことではない。なにしろ人間というものはもともと横着者であり、これまで行なってきた「豊かさ」の追求は、裏を返せば「便利さ」の追求であり、それは単に少しでも楽をしたいという願望から出てきたものにすぎないのだ。だから、いったんあるレベルまで達した人間は、そのレベルを失いたくはないと思う。つ

まり、現在置かれている境遇よりも一層楽になるのなら、どんなこともでも喜んでするだろうが、それに逆行する方向に進むのは好まないのだ。現在の日本はまさにより便利に、より楽に生きようとする人間の集団である。それを考えると「質素で、貧しい」生活を回復することは、日本一国でも相当な努力を必要とすることになるだろうし、ましてやそれについて地球規模で合意を取りつけようなどというのは至難の業ではある。しかし、それを今やらなければ、地球の破滅を救う道は他にはないというようなところまで来てしまっていることを肝に銘じておかねばなるまい。それを消極的な方策だ、たわごとだ、夢物語だなどといって済ませられる時代は過ぎたのだといってもいい。便利さとか楽な暮らしとかいうことは、真の「豊かさ」とは別物なのである。科学ではない、人間のもつそのような精神性にこそ問題解決の最終的な可能性があるのではないかということを繰り返して、ここはひとまず結びとしたい。

註)

- 1) Eugen Roth, 1895–1976
- 2) Harenberg Schlüsseldaten 20. Jahrhundert --- Das Lexikon über unser Jahrhundert, Vierte verbesserte Auflage 1995, Harenberg Lexikon Verlag, hrsg. von Bodo Harenberg, Redaktion (Texte): Tilman Betz, Joachim B. Dettmann usw.
* この辞典からの引用は以下非常に多くなるので、これをHarenberg と略す。
- 3) Harenberg: S. 166.
- 4) Harenberg: S. 234.
- 5) Harenberg: S. 478.
- 6) Harenberg: S. 512.
- 7) Harenberg: S. 540.
- 8) Harenberg: S.552.
- 9) Harenberg: S. 568.
- 10) Harenberg: S. 569.
- 11) Harenberg: S. 607.
- 12) Harenberg: S. 600.
- 13) Harenberg: S. 600, 618, 619, 628, 638, 639, 647, 655.
- 14) Matthias Claudius: Der Mond ist aufgegangen, 1778.

- 15) Johann Abraham Peter Schulz
- 16) Aus: Nicklis, Hans-Werner: *Mundus circumquaque*. Gedanken zur Umwelt des Früh- und Hochmittelalters, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht* 5/1992, Klett Verlag, Stuttgart, Seite 275 ff.
- 17) Brigitte Röttgers: *Schöne neue Welt* (1976), in: *Im Gewitter der Geraden - Deutsche Ökolyrik 1950 - 1980*, hrsg. von Peter Cornelius Mayer-Tasch, Verlag C.H. Beck München, S. 45.
- 18) Ludwig Fels: *Einrichtung* (1973), ebd. S. 48.
- 19) Ludwig Fienhold: *Landschaft* (1973), ebd. S.59.
- 20) Harenberg: S. 716.
- 21) Ulli Harth: *Sichtung* (1969), ebd. S.80.
- 22) Harald Kruse: *Verstädterung* (1974), ebd. S. 80.
- 23) Elke Oertgen: *Luft* (1980), ebd. S. 29.
- 24) Harenberg: S. 732.
- 25) Ludwig Fienhold: *Abwässer* (1973), ebd. S. 32.
- 26) Peter Schütt: *Besitzverhältnisse* (1980), ebd. S. 196.
- 27) Harenberg: *Nationalparks in Deutschland*, S. 599.
- 28) 拙論：『プリンツェン——ドイツ統一直後にスーパースターになったあるロック・グループを巡って』、宇都宮大学国際学部研究論集 第5号、1998年3月、155-186頁。
- 29) *Die Prinzen: Betriebsdirektor*, Text und Musik von Sebastian Krumbiegel, im Album <Das Leben ist grausam>, 1991, BMG Ariola München GmbH.
- 30) Wilhelm Hey: *Weißt du, wieviel Sternlein stehen*, 1836, in: *Mein Heimatland --- Die schönsten Volks-, Wander-, Trink- und Scherzlieder*, hrsg. von Ludwig Andersen, Schott Verlag, 1955, S. 119.
- 31) 拙論：『ウード・リンデンベルクドイツ東西問題に取り組んだリーダーマッハー』、宇都宮大学国際学部研究論集 創刊号、1996年3月、241-254頁。
拙論：『ウード・リンデンベルクの作品にみるドイツ外国人問題』、宇都宮大学国際学部研究論集 第2号、1996年10月、15-32頁。
- 32) Udo Lindenberg: *Weißt du, wieviel Sternlein stehen an dem blauen Himmels-*

zelt, Text und Musik von Udo Lindenberg, im Album <Bunte Republik Deutschland>, 1989, polydor.

33) Johann Wolfgang von Goethe: Der Zauberlehrling, 1797.

34) ゲーテ 『魔法使いの弟子』山口四郎訳、『ゲーテ全集1－詩集1』、潮出版社、1979年6月、99－102頁。

*なお、これ以外の訳詩はすべて筆者自身による。

35) 「地球人の世紀へ——環境問題を考える視点」朝日新聞社論説委員室編著、風濤社、1997年10月23日 第一刷発行、15頁。

Resümee der Abhandlung

<Umweltbewußtsein in den deutschen Gedichten>

In Japan wird oft gesagt, daß Deutschland einer der fortschrittlichsten Staaten ist hinsichtlich des Umweltschutzes, wie z.B. Recycling, sichere Müllverbrennungsanlage, bleifreie Autoabgase usw. Auf der anderen Seite sind Bürgerinitiativen gegen die Umweltverschmutzung sehr aktiv, und sogar ab und zu auch sehr aggressiv, und ich habe auch manchmal in der deutschen Zeitung das Bild von solchen Demonstrationen gesehen. Dabei hatte man oft ein Transparent mit einem Gedicht: "Zu fällen einen schönen Baum, / braucht's eine halbe Stunde kaum. / Zu wachsen, bis man ihn bewundert, / braucht er, bedenk' es, ein Jahrhundert." Das soll angeblich von Eugen Roth, dem berühmten Dichter mit sogenannten "Ein Mensch"-Gedichten, geschrieben worden sein, und wird hauptsächlich von der "Grünen-Fraktion" benutzt. Davon abgesehen, hat mich diesmal das kleine Gedicht zu dieser Abhandlung veranlaßt. Hier in der Abhandlung habe ich die Entwicklung des Umweltbewußtseins bei den Deutschen beschrieben, und vom germanistischen Gesichtspunkt darüber Betrachtungen angestellt, wie sich dieses Bewußtsein in deutschen Gedichten spiegelt.

In der früheren deutschen Naturlyrik waren Menschen und Natur in einer friedlichen Harmonie, als wäre es durch eine göttliche Fügung. Eines der repräsentativsten Beispiele dazu ist das Gedicht von Matthias Claudius: "Der Mond ist aufgegangen...". Damit meine ich natürlich nicht, daß die Welt damals noch ganz umweltfreundlich war. Es gab auch im Mittelalter schon Umweltverschmutzung. Z. B. war schon im 13. und 14. Jahrhundert hauptsächlich in den Großstädten das Problem der Reinigung von Kloaken und einer allgemeinen Hygiene schon deutlich zu fassen, und die Tuchproduktion war damals die Schlüsselindustrie, wobei stark ätzende Gerüche entstanden und das damit verbundene Einfärben von Stoffen mit Tinkturen, die Frage der Entsorgung aufwarf. Außerdem standen dabei nur Gassen und Straßen als Deponie für übelriechende Abfallstoffe zur Verfügung usw. (Hans-Werner Nicklis: Mundus circumquaque. Gedanken zur

Umwelt des Früh- und Hochmittelalters, in: Geschichte in Wissenschaft und Unterricht 5/1992, Klett Verlag, Stuttgart.)

Aber es war doch noch nicht so schlimm daß man es Umweltzerstörung nennen kann. Diese Umweltzerstörung ist inzwischen erst seit dem 20. Jahrhundert, und zwar seit den 50er Jahren, immer schwieriger und gefährlicher. Giftige Chemikalien treten z.B. in Waschmitteln, in Autoabgasen usw. immer häufiger auch im normalen alltäglichen Leben auf. Dazu kommen noch viele verschiedene Problemen, wie Dioxin-Katastrophe, Lebensmittelskandale, Reaktor-Unfälle, Waldschäden, Wasser- bzw. Meeresverseuchung usw. Unter diesen Umständen hat sich auch die deutsche Lyrik rapide verändert, zu Klagen über schreckliche Umweltverschmutzung bzw. -zerstörung, zu Appellen zum Umweltschutz, Warnungen vor der Zerstörung der Natur und dem menschlichen Untergang.

Als Beispiel habe ich folgende Gedichte vorgestellt: “Schöne neue Welt” von Brigitte Röttgers, “Einrichtung” von Ludwig Fels, “Landschaft” und “Abwässer” von Ludwig Fienhold, “Sichtung” von Ulli Harth, “Verstädterung” von Harald Kruse, “Besitzverhältnisse” von Peter Schütt, und dazu noch auch aus der deutschen Popszene zwei Lieder: “Betriebsdirektor” von den <Prinzen> und “Weißt du, wieviel Sternlein stehen” von Udo Lindenberg. Am Ende der Abhandlung habe ich außerdem mit dem Gedicht “Der Zauberlehrling” von Johann Wolfgang von Goethe vor der Gefährlichkeit der Gegenwart und Zukunft der Menschheit stark gewarnt.

(1999年10月28日受理)